

[とよなか山田会ニュースレター]

文化と芸術を愛する人びとの集い

2023.7.10

7

豊中市名誉市民・映画監督



とよなか山田会HP

山田洋次氏に エールを送る

- 編集・発行／とよなか山田会 ●代表／武市 進 ●〒561-0894 豊中市勝部1-1-7 TEL／080-3868-2010
- facebook／toyonakayamadakai.com ●メール／info@toyonakayamadakai.com
- 編集部／西井弘和 〒561-0865 豊中市旭丘1-4-303 06-6843-6700 メール／h-nishi77-100@ab.auone-net.jp

●左／長内繁樹 豊中市長 右／山田洋次監督
(広報とよなか 令和3年(2021年)10月号より)

本紙「とよなか山田会ニュースレター」は、これまで、2017年6月の準備号、2017年12月号、2018年6月号、2019年1月号、2020年1月号、2021年9月号と5号を刊行し、豊中市名誉市民・映画監督山田洋次氏の業績を称え、一層のご活躍を祈って、ご発言や数々の作品と行事をお知らせしてきました。

しばらく休刊しておりましたが、このたび、「文化と芸術を愛する人びとの集い 山田洋次氏にエールを送る」と少し内容を広げ、山田作品とともに、多方面にわたって文化・芸術の情報を取り上げる文化紙として、再刊することにいたしました。

ゲンキあふれるみなさまのご投稿を得て、ささやかながら独特の魅力を持つ情報紙として本紙が成長することを祈ってやみません。ご投稿をお待ちしています。

とよなか山田会 代表 武市 進



2023年8月24日
12:30~
豊中市
文化芸術センター

新作 「は、母さん」

委員会 ◆9月1日（金）全国公開

先行上映会決定!!

山田洋次×吉永小百合×大泉洋が贈る「母と息子」の新たな出発の物語。

STORY

大会社の人事部長として日々神経をすり減らし、家では妻との離婚問題、大学生になった娘・舞（永野芽郁）との関係に頭を悩ませる神崎昭夫（大泉洋）は、久しぶりに母・福江（吉永小百合）が暮らす東京下町の実家を訪れる。しかし、迎えてくれた母の様子が、どうもおかしい……。割烹着を着ていたはずの母親が、艶やかなファッションに身を包み、イキイキと生活している。おまけに恋愛までしているようだ！
久々の実家にも自分の居場所がなく、戸惑う昭夫だったが、お節介がすぎるほどに温かい下町の住民や、これまでとは違う“母”と新たに出会い、次第に見失っていたことに気づかされてゆく。（松竹ホームページより）

配給：松竹

公開劇場：大阪 ステーションシティシネマ、なんばパークスシネマほか

■監督 山田洋次 ■脚本 山田洋次、朝原雄三 ■原作 永井愛

■出演 吉永小百合、大泉洋、永野芽郁ほか ■上映時間：110分

2023年9月1日のロードショー公開に先駆けて、8月24日、豊中文化芸術センターにおいて「こんにちは、母さん」の先行上映会が開催されます。

前作の「キネマの神様」から引き続きの先行上映会です。

今回は、名女優吉永小百合さんと昨年のNHKの大河ドラマ「鎌倉殿の13人」源頼朝役で好演された大泉洋さんです。

山田監督作品の「おとうと」で、姉役の吉永小百合さんと弟役の笑福亭鶴瓶さんの兄弟愛が、今回は母子の深い愛情と絆を思い起こさせる名作になるのではないのでしょうか。

楽しみですね。前回の先行上映会に引き続き山田洋次監督が映画の上映後に舞台挨拶をされる予定です。皆様のご参加を心よりお待ちしております。とよなか山田会 代表 武市進

山田洋次監督の作品のような 人と人のつながりを大切に

豊中市長 長内 繁 樹



いつも、とよなか山田会の皆様には、本市名誉市民である山田洋次監督の顕彰に多大なご貢献をいただき、心から御礼を申し上げます。

平成 26 年に発足して以来、山田洋次監督作品の上映会や勉強会の開催など、様々な取り組みを実施いただいております。皆様の熱心な活動に対しまして、厚く敬意を表する次第です。

本市では、平成 28 年の市制施行 80 周年記念式典において、山田洋次監督に名誉市民の称号を贈呈しました。

そして、令和元年に「家族はつらいよ」の舞台を豊中市民デーとして大阪松竹座で実施しました。また同年に「男はつらいよ お帰り 寅さん」、令和 3 年に「キネマの神様」先行上映会を実施するなど、山田監督の作品を楽しんでいただきました。

山田洋次監督とは 2 年前、豊中市制施行 85 周年を記念し、文化芸術センターで対談させていただきました。監督の中に、豊中の記憶が今も根付いていることを感じ、また、かつて監督から豊中市へ「寅さんの故郷は柴又 私の故郷は豊中です」というメッセージをいただいたことがとても嬉しかった思い出となっています。



対談では、新型コロナウイルスの影響による社会の変化についても話題にあがりました。そのなかで、人と人とのコミュニケーションがあつてこそ、本当のまちであるという監督の思いに同調するとともに、そのような思いが作品にも反映されていると感じました。

例えば、監督の代表作の一つで国民的人気を博した「男はつらいよ」。

作品では、さくら、おいちゃん、おばちゃん、タコ社長をはじめとする柴又の人達の温かさを感じることができます。喧嘩をしても、離れていても、そこには絆、繋がりがあります。柴又の人達は寅さんの帰りを待っている。笑いだけでなく、涙、そして人情を感じることができる、私も大好きな監督作品の一つです。監督の作品は、どれも人と人とのつながりが丁寧に描かれているのも特徴だと思います。

約 3 年にわたり続いたコロナ禍の影響により、人と人とのつながりは、希薄化してしまっていると感じます。家族や地域よりも個を重視する価値観への変化もあると思いますが。

しかし昨年は、豊中まつりが 3 年ぶりに現地開催されるなど、私も多くの地域の行事に参加しました。来場者や運営スタッフの方の笑顔に触れ、お話をするなかで、逆境を力に変え、コロナに負けず地域を盛り上げたいという熱い思いに心を打たれました。

今後も、社会の変化に柔軟に対応するとともに、山田洋次監督の作品のような人と人のつながりを大切に、更に活気に満ちた豊中市になるよう取り組みを進めていきます。



© 2023 「こんにちは、母さん」製作委員会

山田洋次監督最 「こんにちは

© 2023 「こんにちは、母さん」製作

豊中市

山田監督
舞台挨拶決定！

★チケット申し込み

- ①文化芸術センターチケット
オフィスの窓口で直接申し込む
- ②電話 (06-6864-3901) で
申し込む

★チケット申し込み受付日時

7月12日(水曜) 10時～

★チケット代金 / 1200円

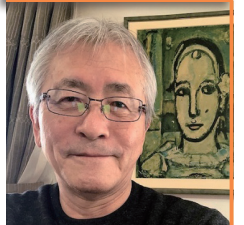
詳細は、とよなか山田会ホームページをご覧ください。

逸郎の映画三昧

山田洋次監督の映画を観る②

寅さんと私たち

田中逸郎



田中逸郎さん

●元・豊中市副市長
NPO政策研究所理事

「渡世人のつれえところよ」
とつぶやきながら元の木阿弥、生き直
すことはできない。

「私は生き直すことができない。」

しかし私らは生き直すことができる。」

(大江健三郎 最後の作品『晩年様式集(イン・レイト・スタイル)』より)

いささか場違いな見出しを掲げたが、映画評第2回目は、50年にわたる映画シリーズ『男はつらいよ』を取り上げる。テキ屋稼業に明け暮れる主人公・車寅次郎、通称「寅さん」の毎度おなじみの恋騒動物語は、日本中を笑いとヘーソンスで包み、国民的人気を誇った。今もテレビ東京で何度も再放送されており、その都度チャンネルを合わせて観入ってしまう。どの作品も(例によって)抱腹絶倒のドタバタ騒動が展開されるのだが、恋の行方と着地は同じ。やっぱり寅さんは失恋し、旅立つ。

「寅さんつらいよなあ」寅さんは成長しない。いくら恋を重ねても、旅しても。その都度決心して新たな人生をめざすのだが続かない。いつだって寅さんに寄り添うさくらの愛があった。でも、さくらの夫の博に「兄さん、堅気になって働き、結婚することがみんなへの恩返し」と諭されてもやっ

「困ったことがあったらな、風に向かって俺の名を呼べ。おじさん、どつからでも飛んできてやるから」(寅さん) 其の典型が、甥の満男である。寅さんの騒動を五感に浴びながら育った満男は思春期を迎え、家出をしたり、バイクで初恋相手の親や家へ押しかける。親への反抗や恋は(あとで振り返ると顔から火が出るくらい滑稽で危ういものだが)、その時は真剣そのもの、後に引けないとばかりに蛮勇をふるって自分を押し出してしまふ。その結果騒動が起こる。満男はそのさなか(毎回そうなのだが)、旅先の寅さんと出会う。かくして騒動はますます複雑に広がっていくのだが、二人はすれ違いやケンカを重ねながらも互いの困難やつらさを受け止め、共有し合う。そして満男は、前を向いて生きていく勇気を獲得していく。満男にとっては、大人になっていくための通過儀礼のような出来事なのだが、それが寅さんにとっては失恋を癒し、旅を続けるエネルギー

これだけ同じパターンが繰り返され展開される映画シリーズは他にはない。でも何故だか、飽きずに観てしまう。あんなおじさんが身内にいたら困るようなあ、と笑いたため息をないませにしながら。そう、いつの間にか、寅さんが私たちの記憶に刷り込まれ、息づいている。何故だろうか、というのが今回のテーマ。



第50作「男はつらいよ お帰り 寅さん」©2019 松竹株式会社



とには反発するが、反発すればするほど、伯父の言葉には耳を傾けるという関係が生まれる(満男が、旅立つ寅さんを駅まで送るシーンで相談する様子が何作も描かれているように)。

いつしか二人は(とりわけ満男は)、寅さんの言葉どおり、深いきずまで結ばれていく。互いの存在、それ自体が生きていくための糧となり、指針となっていく。前へ進むことができるのである。晩年の寅さんシリーズが、その後の満男の人生の歩みを軸にした作品と



キーとなっていくという関係にある。

伯父と甥の関係、これはレヴィ・ストロウスの「親族の基本構造」が解き明かした通り、ある種独特な親密関係を構築するのだから。満男が反抗期を迎え、父の博と対立が深まると、母方の伯父である寅さんとは親しい関係になる。親父の言うこ

なっていくことが、それを象徴している。

私は生き直すことができない。

しかし私は生き直すことができる。

冒頭の見出しに戻ろう。何故、この大江健三郎の小説の一節を掲げたのか。

象徴的に言うところ、満男は寅さんのなかへ入り込み、寅さんを通り抜けて自由を獲得していく。自らの人生を自ら選び取る勇氣は、寅さんと一体となることで得られ、そして成長し(寅さんを通り抜けて)、寅さんの彼方へと歩んでいく。「寅さんつらいよなあ」とため息をつく周りの人たちも同様、生きることの哀しみと愛おしさをかみしめ、それぞれの人生の糧としていく。連帯、といっちは大げさにすぎるかもしれないが、「私ら」の人間らしい結びつきがあることで、それぞれの自由な生き方をめざし歩み始めることができるのだ。そして、その歩みが確かなものになっていくことで、再び「私ら」に戻っていくことができる。そこに、共に生きる新しい「私ら」の姿が立ち現れる。

そう、このようにして人は生きていく(このようにしてしか生きていけない、というべきかもしれない)。大江健三郎は全作品を通して、様々な困難のなかで生き続けるための勇氣と人間の在り方を探求し、私たちが進むべき方向を提示してきた。山田洋次監督も同様、共に生きることと孤独に耐えて生きる勇氣、この深いつながりを描き続けてきた。1回目の映画評で紹介したように、監督は「観客の胸の中に熾(おき)、つまり火の消えた炭がある。僕たちの仕事は、その熾にもう一回火をつけること」(豊中市先行上映会『キネマの神様』にて、2021年7月9日朝日新聞夕刊より)と述べているが、私たちが生きていくうえで大切なことを見失わないようにと、寅さん

を通して私たちの胸の中にある熾に火を灯し続けてきたのだ。『男はつらいよ』シリーズが50年も続いた所以ではないだろうか。

さて。一向に成長せず、旅暮らしに明け暮れる寅さんだが、でも確実に年老いていく。後年の作品の多くは、自身の燃え上がる恋から、若者の恋物語の指南役としての寅さんが引き起こすドラマへと変わっていく。そんな中、リリーとの恋は違う。回を重ねるにつれ、愛の高みへと歩みを進めていく。そして沖繩が舞台となった作品では、周りの人たちもファンも誰もが望んでいた結婚へと向かうのだが……山田洋次監督はそうはさせなかった。

何故か。そこには監督の、例えば『家族』などの現代劇として一連の時代劇とも通底する、社会への深く鋭い視点と人間観、哲学が込められているのではないか。これを次号の映画評③のメインテーマとし、寅さん以外の作品群にもふれてみたい。



第25作「男はつらいよ 寅次郎ハイビスカスの花」(C)1980 松竹株式会社

●ニュースレター6号記載の田中逸郎氏ご投稿文。最終行から4行前の、「温かい」を「暖かい」と誤記しました。謹んでお詫びし訂正させて頂きます。

あたしの兄ちゃん 車寅次郎

劉 燕子



劉 燕子さん

●現代中国文学者。博士(学術)。湖南省出身。大学で教鞭を執りつつ日中バイリンガルで著述、翻訳。「天安門事件から『〇八憲章』へ」(共著)、「私には敵はいない」の思想」(共著)、「殺劫—チベットの文化大革命」(共訳)、「劉曉波伝」(編訳)など。

寅さんは不屈きにも年中ぶらぶら遊ぶ「渡世人」

「私、生まれも育ちも葛飾柴又です。帝釈天で産湯を使い、姓は車、名は寅次郎。人呼んでフーテンの寅と発します。」

歯切れのよい鮮やかな口上が持ち前の寅さんが中国のスクリーンに初登場したのは一九八〇年代初。それは社会の大きな転換期で、日本映画の全盛期でもあった。この理由として、資本主義社会の物質的な豊かさへの羨望、批判すべきブルジョワ的な都市生活をポジティブに捉えるという価値観の衝撃、目新しい映像や音楽による視覚的聴覚的な刺激などがあげられる。

寅さんは、不屈きにも年中ぶらぶら遊び、賭け事も楽しみ、恋にうつつを抜かしている「渡世人」。このような男が主人公になっている映画を見せていいのだから

うかと、保護者のおばさんたちが学校に押し寄せて陳情したという。

文化大革命とフーテンの寅さん

建国後、社会主義イデオロギーで大衆を動員するために毛沢東を偶像化した「毛沢東主義モデル」はあらゆるメディアに浸透し、映画はその一つであった。

この基本的指針は一九四二年の毛沢東の『延安における文芸講話』に求められる。それから文化大革命までの過程における数々の粛清により、このイデオロギーは極度に純化され、完璧な理想的様式として中国全土に定着した。映画により「正しい」思想に洗脳され、その「正義」に酔うことが教化の目的とされた。ところがフーテンの寅さんはいつも同じ背広と腹巻きで、帽子をかぶり、セツタを履き、

トランク一つを片手に風の向くまま気の向くまま旅するテキ屋稼業で、財布の中の五百円が命の綱。明らかに前述の三原則に反する。

「階級の敵」とされた父 寂しい鉱山で暮らした私

また「商業学校」中退で小学校卒のみの寅さんは、一九七七年末、文章の十年間に停止されていた大学入試が再開され、他人を蹴落として自分は一上へ上へと必死になる学歴主義・受験競争とは正反

対。こんな寅さんを手本にすれば私も落伍者になるが、あの中国文化大革命のとき、子供の頃、「階級の敵」というレッテルを貼られた父とともに白眼視されて寂しい鉱山生活を送った自分を彷彿とさせられた。

「寅さん会いに来ましたよ」。柴又ツアーに参加

留学生として来日し、アルバイトで少しお金がたまったので上京し、はとバスの柴又ツアーに参加。「寅さん、会いに来ましたよ」。矢切の渡しにも乗り、ほんとうに風情と人情にあふれる旅であった。

一九九六年八月、遊学先のアメリカで中国語のニュースから寅さんの永眠を知った。寅さんはずっと私の心の奥底で生きていて、まるで兄ちゃんが亡くなったように呆然とした。

渡米したが大学院進学のための勉強が進まず、落ちこぼれそうで鬱々としていた。そのような状態で韓国人の経営する雑貨屋が「男はつらいよ」シリーズのレンタルをしていることを知った。第一作から第四十八作まで全て観ても倦むことがなかった。笑い、泣き、また笑っているうちに辛いことをしばらく忘れ、次第に心の中の塵芥(ちりあくた)がなくなり、ほっとし



第24作「男はつらいよ 寅次郎春の夢」
(C)1979 松竹株式会社



劉曉波と筆者(2007年3月27日、北京にて)
[劉曉波] 1989年、天安門民主化運動に参加するため敢えてアメリカから帰国し、6月4日の武力鎮圧の時は戒厳部隊と交渉して学生・市民の広場からの無血撤退を実現したが自分は投獄。釈放後も民主化に尽力し、2010年には獄中でノーベル平和賞を受賞するが、2017年に事実上の獄死。

山田監督へのひそかな想い

平嶋規佐子

戦後、私たちは芸術に飢えていた

敬愛する山田監督については、伝えきれないほどの思いがあります。戦後、芸術に飢えていた私たちの世代は、邦画・洋画に関係なく、立ち見でも争って観たものです。監督の作品、特に「寅さん」は、年に二回家族で見にゆくの恒例でした。

現在も監督の作品は、時代劇・現代劇にかかわらず全て観ています。藤沢周平の小説を原作にした映画も大好きです。豊中文化芸術センターでの「キネマの神様」上映会にも当然行きました。

ラジオで聴いた監督の原点

監督が満州から山口市へ引き揚げてきた中学二年の

た気持ちになる。どれほど助けられたことだろうか。

登場人物のほとんどが善男善女。帝釈天の門前のだんご屋「とらや」は店の奥に茶の間があり、夕方になるとガラス戸を閉め、ちゃぶ台を囲み一家団欒で夕ご飯を食べる。そのような時に寅さんがフラッと帰ってきて、みな驚きながら歓迎するが、ささいなこと大げんかになったりする。



アメリカ・メリーランド州にて(1997年)

「馬鹿だね、あいつ」、「ほんとに馬鹿だよ」と叱られたって、いつでも暖かく受け入れられる。そのような安心できる居場所が「とらや」。

平嶋規佐子さん

●1942年(昭和17年)岡町生れ。アナウンサーとしてラジオ才局2局勤務。のち社会福祉法人日本ライトハウス(目の不自由な方のための支援組織)で朗読奉仕を続ける。娘が宝塚歌劇に入団、一家で支援。現在はロマンと実益のため「ギャラリースタジオETHOS」経営中。



時、海岸の工場で仕入れたちくわが売れぬまま、競馬場のおでん屋のおばちゃんに持ち込んだら、「みんな買うたげる。明日から残ったら持っておいで」と言われたという思い出話をラジオで聞きました。

その帰り道、自転車で涙がぼろぼろ出てきたそうです。「そのときのそのおばさんの温かい行為ってというのは、いまだにまざまざと覚えてるんだよ」。

これがご自身の原点であるとおっしゃっていたことが強く心に残っています。

山田監督作品に通底するもの

監督は、その全ての作品で市井に生きるつつましい人物の姿を撮り続けていらっしやいます。そして、そ

寅さんは日本人の「心の故郷」だけでなく、私の「心の故郷」

寅さんは面白くも切ない道化役を演じながら、限らない自由への憧れと人への愛、人生の夢と勇気を呼び覚ましてくれる存在であった。寅さんが「奮闘努力の甲斐もなく」でも生きていく人生は、「流れ流れの渡り鳥」のように漂泊していた不器用な私にとって励みであった。寅さんは日本人の「心の故郷」だけでなく、私の「心の故郷」でもある。

今、博士号を得て、大学で教鞭を執ったり、作家ぶったりしているけれど、あれこれしょうもないことで悩んで疲れたりする。そんな私を、兄ちゃんはどういう風にかうだろう。「さしずめインテリになったのかい、インテリというのは自分で考えますからね」。

の映画全てに品があり、人間の愛と哀しみ、優しさ、あたたかさ、ユーモアがあります。

「人間はこうでありたい」という、監督の強い信念を感じるとともに、その信念を貫いている監督をとても尊敬しています。

心からエールを

「寅さん」シリーズ終了後も、素晴らしい映画を撮り続けていらっしやる山田監督に、心からエールを送ります。情熱を失わず、これからも長く撮り続けていたいただきたいと願っています。



ギャラリースタジオ「ETHOS」

山田監督作品と「き父の縁

池田千波留



池田千波留さん

●10年以上のOL生活を経て、声の仕事に転身。コミュニティFMのパーソナリティ、司会、ナレーション、アナウンス、ライターと、さまざまな形で情報を発信している。ここ数年は作文教室の講師も務めている。

日本が世界に誇る山田洋次監督について、極めてプライベートな話にお付き合いいただけるとありがたい。

お別れの歌は「男はつらいよ」

今年2月1日、父が他界した。昨年末に余命半年と告知されたのに、せっかちな父はたった一ヶ月ほどで旅立ってしまった。親戚一同、急な展開に気持ちがついていかず、呆然としながら葬儀の日を迎えることになった。棺に花を供えて別れを惜しむ時間、それまでのしめやかなBGMが変わって、独特なバイオリンの音色が聞こえてきた。続いて「わたくし、生まれも育ちも葛飾柴又です」というセリフが。

そう、音楽は渥美清さんの『男はつらいよ』。死期を悟った父が、自分の葬儀の際にはこの曲をと、言い残していたのだ。涙ながらに花をたむけていた親戚一同に一瞬、フッフと笑いが起こった。これは8人兄妹の長男として家族を引っ張ってきた父の、親族に対する最後の思いやりだったのかもしれない。

映画と生きた父

1953年（昭和28年）、父は高校を卒業してすぐに、映画館の経営者になった。祖父が立ち上げた映画館を引き継いだのだ。尼崎市にあった映画館「近松映画劇場」。今のようなシネコンではない小さな町の映画館ではあったが、時には主演スターが挨拶に来てくれることが

あったらしい。父にとって一番のスター鶴田浩二さんがいらっしやった時のことを、私は父から何度も聞かされている。「スターっていうのはな、向こうからただ歩いてくるだけでも光ってるんやぞ」。

テレビの台頭で経営が苦しくなるまでの数年間、大好きな映画と共に生きた父は幸せだったと思う。

「幸福の黄色いハンカチ」に登場した父の会社の製品

1961年（昭和36年）、映画館をたたんだ父は、全く違う業種の会社を立ち上げた。段ボールシートの製造、パッケージ制作の会社だ。

映画とは全く無縁のように思えたこの会社が映画館の大スクリーンに登場することになるとは、誰も想像していなかったと思う。それは1977年（昭和52年）に上映された、山田洋次監督の『幸せの黄色いハンカチ』。奥さん役の倍賞千恵子さんの妊娠を知った高倉健さんが、祝いにと胸に抱いて帰ったのは日本酒「多聞」。その外箱を製造納品していたのが父の会社だったのだ。



「幸福の黄色いハンカチ」
(C)1977 松竹株式会社

映画館の経営をやめた後も映画を愛した父にとって、自分の会社の製品が高倉健さんの胸に抱かれて大画面に登場したことは、どれほど嬉しかったことだろう。

2006年に多聞酒造は解散、2014年には高倉健さんも天に召された。だが、映画は半永久的に生き続けるのである。本当にありがたいことだと思う。

「男はつらいよ」バイオリンist天野紀子さんとの縁

父の会社に入社せず、自分の道を模索した私は現在、ラジオパーソナリティとして活動させていただいている。仕事柄色々な方のお話を伺い、ゲストとしてお迎えするのだが、「男はつらいよ」のバイオリン演奏をなさったバイオリンist天野紀子さんをゲストにお迎えする機会を得たことには、偶然とは思えない縁を感じている。

励ますつもりが励まされ

このエッセイは山田洋次監督への応援という趣旨で書かせていただいているのだが、こうして振り返ってみると、私が監督を応援するどころか、応援されていたのはむしろ私の方なのだ。おそらく、形は違えど、山田洋次監督作品に励まされ、力をもらっている方は数えきれないほどいらっしゃるだろう。山田監督の作品には、時代や価値観が変わってもなお心に響くテーマがあるから、これからも励まされる人は多いと思う。

山田洋次監督、これまで本当にありがとうございました。どうかこれからも私たちを励まし、力付けてください。